

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第129回

建国神話の海外受容から戦前期の海外 日本展示へ 日仏美術学会・関西例会でのコメントから*1

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター、総合研究大学院大学教授、放送大学客員教授)

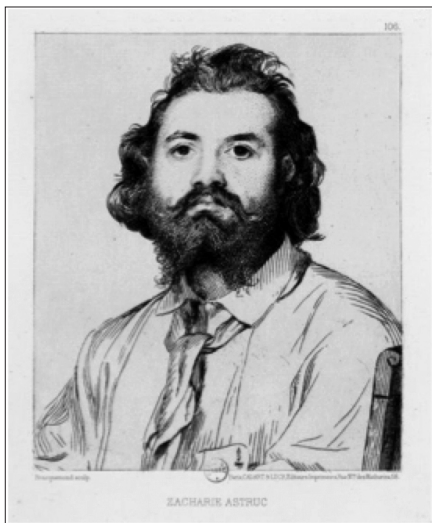
知られざる極東の国への視線

未知の国やその文化を探究する初期には、珍妙な誤解や単純な誤訳も多発する。19世紀後半に日本は広く欧米に紹介された。だがたとえばエドモン・ド・ゴンクールが紹介した赤穂浪士の復讐譚では、泉岳寺がtemple de la montagne du printemps、つまり春岳寺に化けている。おそらくフレデリック・ディッキンズの英訳にspringと訳されたのを見て、フランスの作家がそれを春ではなく、春と解釈したところから発生した誤訳だろう*2。それに先駆け、ザッカリ・アストリュックという劇作家■01が日本を舞台にした空想オペラîle de Demoisellesを残す。「娘たちの島」とは何か、と思ってしまうが、demoisellesは蜻蛉のこと。とすればこの作家は、「秋津洲」という表現を知っていたことになる。『蜻蛉集』とは作家のジュディット・ゴーチエが西園寺公望から提供された『古今和歌集』の仏訳を推敲し、それに山本芳翠が挿絵を入れて成った詞華集の題名だった。その一冊を入手したイタリアの詩人ダヌンチオが「ウタ」をつくっている。早稲田大学戸山図書館にある一冊はダヌンチオ

の手澤本だったことが証明されており、そこへの書き込みでダヌンチオは紀友則に歌合わせを挑んでいる。イタリアの詩人の日本の歌詠みに対する対抗意識は、後の詩集では削除される。だが、手澤本の書き込み草稿や雑誌掲載時の初出形態からは、ウタ成立の隠れた発想源が復元される*3。

この『蜻蛉集』について博士論文のある吉川順子さんは『古事記』『日本書紀』冒頭にある「国生み」神話がいかに西側社会に伝播したかを研究している*4。ジョアン・ロドリゲス(1566?-1633)の『日本大文典』(1604-08)には、イザナキとイザナミが男女逆転しつつも、すでに記載されている。ロドリゲスは『日本文法典』の著でも知られ、早くは土井忠生に研究もあるが、その彼は最初にはラテン語と同様の格変化で日本語の助詞を理解しようとして無理を悟り、日本語に未知の文法体系を探り当てるに至った最初の学者でもあった*5。

ケンペルやジーボルトの日本神話に関する知識は、江戸時代以降、世間に広く出回っていた『節用集』経由であり、ロドリゲスとの関係の有無は確認を要する



■01 フェリックス・ブラックモン《サッハリ・アストリュックスの肖像》

が、19世紀末になると、英語圏の来日お雇い外国人とその周辺で、日本神話の研究も本格化する。バジル・ホール・チェンバレンによる『古事記』（1882）、ウィリアム・ジョージ・アストンによる『日本書紀』（1896）の英訳が知られるが、周知のとおり、二柱の神が鶴鴒の例に習って「まぐわひ」をなした、という下りの台詞には、突如ラテン語が用いられている。露骨な性的表現への訳者の忌避とも、低俗な会話に無理にでも神々しさを纏わせようとした苦肉の策、とも取れる。

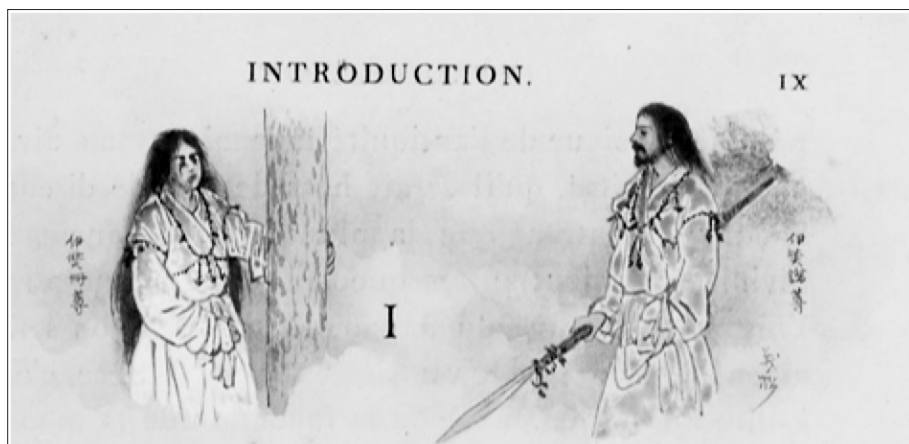
フランス語圏では、コレージュ・ド・フランスで最初の日本学を担当したレオン・ド・ロニー■02に『詩歌撰葉』（1871）が知られ、フランス国立図書館には、それに五姓田義松が手彩色を施し、イザナミ、イザナキほかを細密な挿絵で描いた版が知られる■03。この仕事については領収書の類まで残っているそうで、宮崎克己氏の研究によれば、パリ滞在中の義松は、これを軍資金として北米渡航費に充

てたらしい*6。ロニーも「まぐわひ」の箇所にはラテン語を用いているが、実は来日以前に、シンシナティー時代のラフカディオ・ハーンが、これらロニーの著作に親しんでいたことが、富山大学に保存されている「ヘルン文庫」の来歴から判明する*7。従来、ハーンの日本知識は英語情報から得たものとされてきた。だが実際には、将来の小泉八雲はそれ以前にフランス語経由で、日本の古代詩歌の存在を知っていた。そのハーンが神話の国、出雲を最初の赴任先にしたのも、けっして偶然ではなかったことになる。

国生み神話への評価を含め、チェンバレンやアストンは、日本の神話や詩歌の伝統にけっして高い評価を与えていない。それは当時の西洋世界の価値基準に照らして、あるべきものが欠如しているという判断に由来した。アストンは「ふたりの神に霊的なものは何もない」「われわれのいう至上という着想をほとんど満たしてはいない」と『神道、古代日本の宗



■02 五姓田義松《レオン・ド・ロニーの肖像》



■03 五姓田義松《イザナギとイザナミ》

教』(1905)で弁じている*8。その背景には、1890年代の大日本帝国憲法制定の前後から盛んになった、神道のいわゆる「(超)国教化」という日本政府の政策への反発も無視できまい。*Transactions of Asiatic Society of Japan*に残された神道論争には遠田勝に優れた研究がある*9。ところが英国人とは好対照にも、ロニーはイザナミ・イザナキを「古代大和のアダムとイヴ」と見做し、人間的な感情に溢れ、「人間の端くれ同然に生き、苦しみ、産み、死ぬ」祖先神

としてのかれらへの共感を隠さない。あるいはハーンが日本神話へ親密な接近を果たし得た理由の一斑や、日本の神話や歌謡についてチェバレンとは意見を分かちこととなった背景にも、ハーンが夙にロニーの著作に親しんでいた、という経歴を想定できるかもしれない。そしてハーンが『知られざる日本の面影』で発掘した土地は、出雲大社■04を代表として、巨木文化の揺籃であり、それは縄文期の日本海沿岸に沿って、青森は三内丸山■05にまで広がっていた。

■04 出雲大社境内で発掘された巨大な柱(2010年4月29日付け新聞記事)





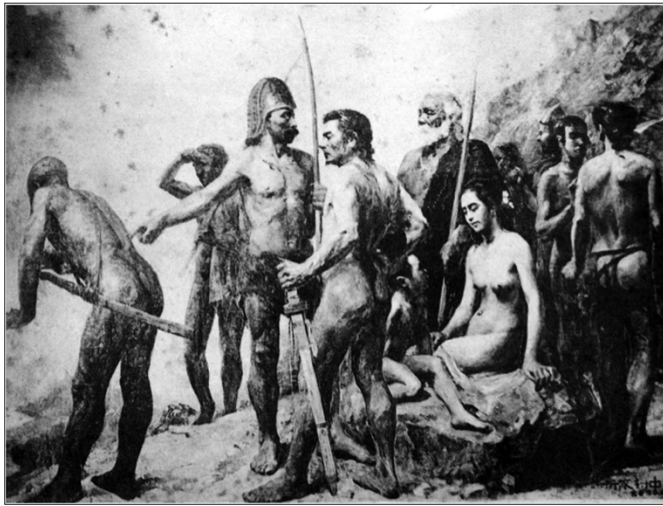
■05 三内丸山遺跡(全景)

近代に生き延びる建国神話の幻

欧米圏で日本神話に関する知識が広まるのと呼応して、日本側でも古事記以来の神話を洋風に提示する試みがなされてゆく。油彩画による神話画や歴史画がその典型だろう。早くは、パリ時代の五姓田とも親交のあった山本芳翠の《浦島図》(1893-4)。筆者はそこに、ジャン＝レオン・ジェローム系のオリエンタリズム絵画と、水官などを描く道教図像との折衷あるいは習合を想定している。それに続くのが、青木繁の《わだつみのいろこの宮》(1907)や《大穴牟知命》(1905)。とりわけ後者は、テオデュール・リボーの《良きサマリタ人》(1874-5)といった聖書画の焼き直しではなかったか。さらに中村不折はジャン＝ポール・ローランスに師事したが、そのローランス風の異端審問の場面、例えば《ラングドックの扇動者》(1887)は《廓然無聖》(1914)などの仏教画に転用さ

れる一方、《建国勲業》(1907) ■06の裸体の神々は、おそらくはフェルナン・コルモンが考古学知識を利用して描いた旧約聖書の場面、現在はオルセー美術館にある大作《カイン》や、サン＝ジェルマン・アン・レイの人類史博物館の壁画として制作された先史時代や歴史黎明期の人類の情景に負っているものだろう*10。裸体の英雄の扱いとしては、これより早い新古典派のジャック＝ルイ・ダヴィッドの《サーモピレーにおけるレオニダス》なども、訪欧中の不折は目にする機会に恵まれたにちがいない。

絵画アカデミーにおけるいわゆる「歴史画」は、20世紀にはいると本場の欧州で著しい凋落を閑した。それでも北米新大陸では、思わぬ場所に日本神話の大壁画が、いまでも現存する。ニューヨークのセントラル・パークの西側に位置する自然史博物館エントランスの壁画であり、



■06 中村不折《建国勲業》
1907 （関東大震災で焼失）
（出典：中ザワヒデキ文献研究
講義用覚書
<https://www.aloalo.co.jp/na-kazawa/2018/0530a.html>）

完成は1936年。そこにはパナマ運河開削とアフリカ開発の情景とともに、3面の壁面の一面にはポーツマス条約締結を中心とする画面■07が見える。いずれも辣腕大統領として名を馳せたセオドア・ルーズベルトの事績顕彰。日露戦争の講和を実現した大統領の勇姿の周囲には、ロシア建国神話と左右対比して、日本の建国神話に纏わる図像が大壁面を覆っている。

堂々たる太陽神・天照大神と、対照的に影の薄い月読尊の見える場面は、天岩

戸の逸話。岩屋に逃げ込んだ女神の関心を引こうと裸体で踊るアメノウズメの命が、ギリシア神話のパオバと酷似しているのは、比較神話学が語るところ。さらにヨモツイラサカでイザナキが果物を撒き散らしてイザナミの追手を振り払う場面は、青木繁にも作例がある。この逸話は、これまたパリスの審問に登場する林檎を彷彿とさせるが、イザナキの冥界探訪がオルベウス神話と示す類縁性も、偶然の一致というにはあまりに酷似する。

■07 《ポーツマス条約調印式》
ニューヨーク自然史博物館 エントランス・ホール壁画（この壁画の右上側に、日本神話の画面があり、その上端に国生み神話の画像がある）





■08 L姉n_Henry Bloch,
1937年パリ万国博覧会,
アルマの木製の門と歩道橋

自然史博物館壁画に戻れば、天照大神の脇には、いささか寸法違いの太刀を振るうスサノウの尊、そして霧島か阿蘇のような山塊を背景とした神武天皇といった神格が、アルファベットで名を付されて、満州事変勃発後の北米合衆国の公共空間に、米国人画家の手で、なに憚ることなく描かれていた。画家はウィリアム・マッケイ。米国史の専門家でもなければ、お馴染みの名ではあるまい。イザナキとイザナミが天の橋立に立って天鉦で海を掻きまわし、秋津洲を創生する「国生み」が最上部を占め、目を凝らせば、鶴鴒から「目交ひ」を習う場面も、克明に描いてある*11。

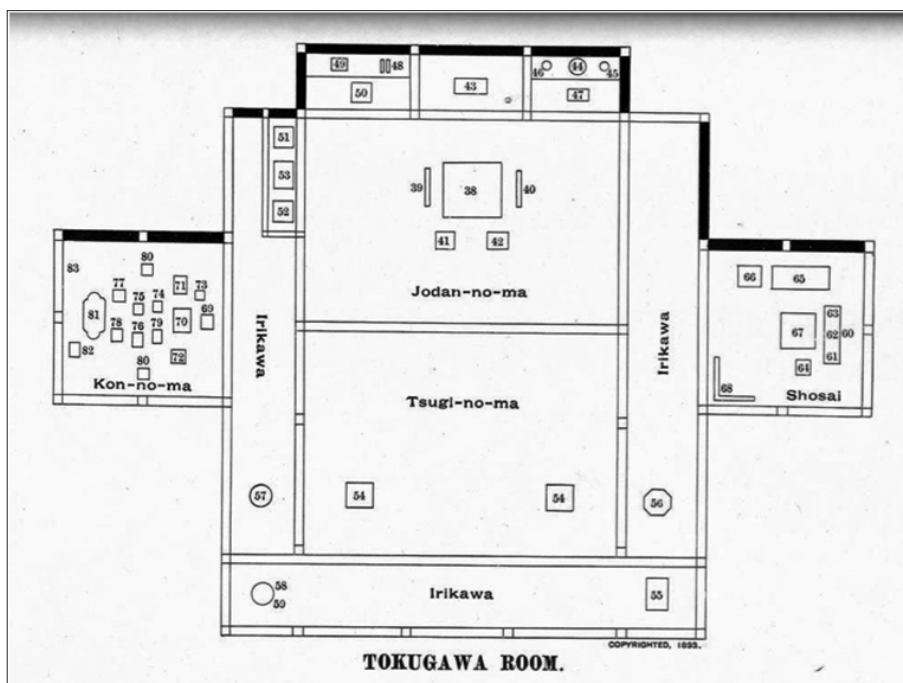
日本展示の潜在的可能性 ——1937年パリ万国博覧会再訪

その翌年の1937年、パリで5度目の万国博覧会が举行される。高階絵里加氏の研究は、この展覧会が手仕事の復権と自然素材の尊重を理念とし、とりわけ木材の活用に力点を置いた企画であったことを重視する。なかでも博覧会会場をセー

ヌ川が二分するアルマ橋の周辺の交通量緩和のため、長さ65メートルにおよぶ歩道橋とアーチ橋が木材によって設けられた。■08その横にはジュラ産のモミによる高さ50メートルの記念碑が佇立する。アルバー・アールトによるフィンランド館も木材構築であり、石やセメント、鉄材に代わって木材の長所の見直しが声高に訴えられた。

急遽、起用された坂倉順三によるピロティ構造の日本館■09も、会場の樹木伐採に高価な代価を要求された立地条件のもとで、効率的な予算運用を果たす案だった。スロープを伴う導線は、商品展示に関しては十分に生かされない恨みを残したが、その後隆盛をみる写真パネルなどの視覚展示に適した観覧条件をいち早く具現した仕組みだった。

その坂倉がパリで勤務していたのが、ル・コルビュジェのアトリエだった。大原美術館本館の建築でも知られる薬師寺主計の証言によれば、スイス出身のこの建築家は日本の詩情に深い関心を示していたという。1922年と推定されるメモに



■09 Tokuga Room 鳳凰殿中央部 シカゴ万国博覧会 1893年 平面図

は、人体を基本尺度とするモデュロール構想を書き留めた右頁と隣あった左頁に、日本の畳の挿絵があり、一畳敷の内法を基準として構成される日本の木造建築構造への認識が、ル・コルビュジエの「住む機械」構想の合理主義と共鳴していた様子も推察できる*12。高階氏の指摘によれば、不思議なことに欧米の研究者たちは、この明白な事実を、今日まできれいに見落としてきていたようだ。

この指摘は、聴く者をいくつもの連想に誘う。日本の大工仕事や指物師のメチエへのル・コルビュジエの理解には、家具職人シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレとして出発した彼の出自も偲ばれる。とともに、同時代のさまざまな動向が脳裏に浮かぶ。先行する建築家としては、フランク・ロイド・ライトは1893年のシカゴ・コロンブス万国博覧会での日本展

示場、鳳凰殿の平面図■09から、規則的な柱の設定を基準として間取りが構成される木造建築の原理をはやくも見抜いており、それをチーニー・ハウスなどで実地に運用してみせたと推定されている*13。また日本に亡命同然の姿で到来したブルーノ・タウトが伊勢神宮を「発見」したのも、パリ万国博覧会に数年先立つ1933-4年のこと。20年ごとに遷宮によって造替を繰り返す神殿は「永遠に古く、永遠に新しい」。それもタウトにとっては、部材の代替によって新陳代謝を繰り返す、極東の木造建築という特異な生命体への開眼だったにちがいない*14。

ル・コルビュジエに戻るならば、その盟友のシャルロット・ペリアンが来日して、仙台の工藝指導所で、木材や竹製品の家具考案に参加する。竹製品の開発には民藝の価値観との共鳴も取り沙汰され



■10 アントニン・レーモンド
《夏の家》軽井沢
1933年

るが、菊池裕子も指摘するとおり、そこには折から日本が領有していた台湾での地場産業の開拓といった時局的な配慮も無視できまい*15。ちなみに、仙台でペリアンと知り合ったのが剣持勇だが、剣持考案の加工木材による量産可能な椅子や家具は、皮肉なことにも、敗戦以前の日本では実現をみない。部材として必要なベニア合板の量産が当時の日本ではまだ不可能だった。そのため剣持の椅子が実際に広く活用されるのは、敗戦後、物資統制が解け、占領米軍のクラブからの発注に応じるようになってからのこと*16。日本の誇る木工技術は、自然木の個性を生かす数寄屋のような高級品には対応できたが、戦時下の要請する安価な大量生産への対応では、思わぬ遅れを取ることとなった、とも評せようか。木製の錦織の機などに顕著な「適材適所」を美德とする伝統的価値観は、物量に物を言わせる総力戦という社会環境とは、反りがあわない遺物となる——。そんな時代相も露わになる。

さらにル・コルビュジエとの関連では、

当時日本で建築事務所を開いていたアントニン・レーモンドのことも想起される。レーモンドが軽井沢に自身の別荘兼アトリエ「夏の家」■10を完成させたのは、1935年、現地で入手できる種々の木材を組み合わせた会心の作だが、これにル・コルビュジエは嫉妬と裏切りとを感じずにいられなかった。その詳細はヘレナ・チャプコヴァーの論文*17に譲るが、レーモンドは批判に應えて、誰から靈感を得、どこから影響を受けたのか、ではなく、それらの靈感や影響をどこへと導くのが大切だ、と述べている。

原爆の災厄から木材資源の再発見へ？

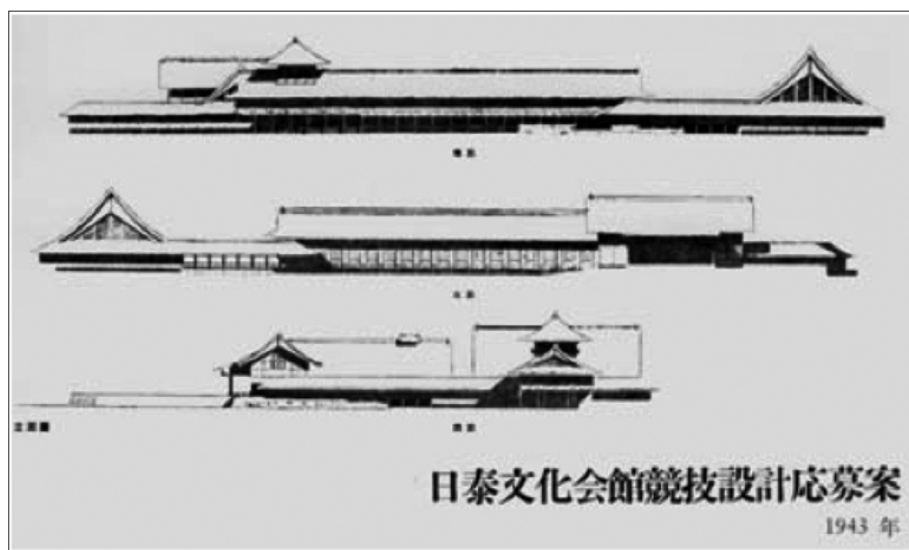
手仕事に携わる「手の内」に精神は発芽する。そこには素材との触れ合いが温められる。そうした発想を縦横に綴ったエッセー「手を讀んで」を、美術史家のアンリ・フォションが晩年に、亡命先の北米で残している。著者の没後『形の生命』に付論として収められる、このフォションの手と手仕事の意義を巡る思索も、1937年パリ万国博覧会の主導理念との

関係で問い直されねばなるまい*18。

思えばフォシヨンの父は、版画職人であった。自らも絵画をよくしたフォシオンは、北斎の筆の魅力を語る著作も残している。リヨンの美術館長時代には、日本の画家たちと深い交流のあったラファエル・コラン旧蔵の日本の茶道具や陶磁器を美術館に受け入れる責任者も務めている。掌にめぐらして賞玩する茶陶の触れ合いの魅力。フォシオンもまたそれを共有できる感性の持ち主だった。「目と精神」ではなく「手と精神」(ジャン・プラン)という問題構成に触れる術を心得た人びとが、森林資源の復興政策が唱えられる1930年代には、洋の東西を問わず、少なからず登場した。その可能性はしかし、数年後に到来した第2次世界大戦(木製飛行機開発計画!)が根こそぎに奪い去ってしまったようにも見受けられる。

1937年のパリ万国博覧会への日本の参加には、国際連盟で重責をになった、時のフランス大使、佐藤尚武の尽力も大き

かったという。佐藤はジュネーヴでの日本の国際連盟脱退のおり、日本の帝国事務局長として、松岡洋右の傍らに居た人物でもある*19。はたして彼と、国際文化振興会の立ち上げに尽力した柳澤健との関係はどうだったのか。柳澤は1936年にブエノス・アイレスで開かれた国際ペン・クラブ大会に島崎藤村らを派遣した影の立役者。ここには紀元2600年に日本で万国博覧会やオリンピックを開催させたいという国策が反映していた。その柳澤は、松岡洋右が断行した大量斬首によって外務省を離れ、バンコクの日泰文化会館館長におさまる人物でもある*20。そのバンコクで計画された日泰文化会館コンペに優勝したのが丹下健三■11。これも木材を巧みに活用した建築案だったが、その丹下がモスクワでの都市計画にル・コルビュジエが提案していた平面図のプランを引き写しにして実現したのが、原爆により灰燼に帰した広島市の平和記念公園マスター・プランだった。その打ち放し



■11 丹下健三 日泰文化会館競技設計応募案 1943年



■12 「千木と鯉木の起源」『北斎漫画』八篇

のコンクリートには木肌が目立ち、折からの朝鮮戦争による資材不足も露呈していた。

パリ万国博覧会では、木村伊兵衛が撮影した子供たちの遊ぶ写真が展示された。プロパガンダ雑誌として著名な *Nippon* との関連も濃厚である。また国際文化振興会の後ろ盾で藤田嗣治も参画した映画製作は、国辱的などという批判も浴びたため、全面公開には至らず終わった。だがそこでも、藤田は田舎の子供たちが素朴な遊びに興じる姿を念入りにフィルムに収めようとしていた。陽気なチャンバラごっこの末、木刀で切腹を演じてみせる子供。そこには「性に目覚める以前」の幼児たちの無垢な世界、あるいは『古事記』や『日本書紀』の「国生み」の神話がおおらかに描いていた生活の営みすらも、キリスト教的な倫理観以前の世界あるいは現実離れした神話的ユートピアとして、なにがしか反映されてはいなかったか。『北斎漫画』8巻には、大戸

之道尊・大苦邊尊の二神が始原の木造小屋を営む空想裡の情景も見える■12。

1936年、戦前期の日本の経済指標は、さまざまな分野でピークを迎える。だがその翌年9月には物資統制令が施行され、国情は臨戦態勢への傾斜を顕著にし始める。そして近隣諸外国を戦禍に巻き込む大戦での敗北を挟み、日本の経済指標が戦前の水準に戻るのは、「戦後は終わった」が標語となる1960年代を待たねばならない。そこには「失われた四半世紀」が感得される。その間に喪失した可能性の再点検も、機械文明が終焉を迎えた「原子力文明以降」の、いまの課題ではあるまいか。黒川紀章や川添登らのメタボリズム建築から、東北の震災を経た、隈研吾の木造建築志向の今日にまで至る系譜。それは、列島の神話形象とその海外における受容の変遷とに、いかにも密接に呼応する文化現象だった、といえるのだから*21。(2017.07.18-27-28 2017年7月18日稿, 18年9月21日訂正)

〔注〕

*1 2017年7月15日、京都大学文学部で行われた「日仏美術学会第143回例会」「『日本』はいかに受容されたか——ジャポニスムの今日的視点から」における筆者の即興のコメントを、備忘録のため文字に起こした。本稿の公表に同意いただいた発表者の吉川順子、高階絵里加の両氏、質疑応答で卓抜なコメントを頂戴した高階秀爾先生、コーディネイターの久保恭子氏はじめ、出席者・関係者の皆様に謝意を表する。なお高階絵里加「手仕事と現代性——一九三七年パリ万国博覧会における日本の展示をめぐる」(pp.3-20) および上記2本の発表要旨 (pp.51-53) が『日仏美術学会会報』2017年度、第37号に掲載されている。

*2 Edmond de Goncourt, "Une Écritoire de poche", *Le Japon artistique*, No.6, oct., 1888.

*3 尾崎 有紀子「『蜻蛉集』とダンヌンツィオ——「西洋うたOuta occidentale」新資料をめぐる」『比較文学年誌』46, 2010年, 89-109頁。

*4 吉川順子『詩のジャポニスム—ジュディット・ゴーチエの自然と人間』, 京都大学学術出版会, 2012年。

*5 『ロドリゲス日本大文典』(長崎: 1604-06) 土井忠生訳, 三省堂, 1955年。土井忠生・三橋健解説『日本大文典』, 勉誠社, 1976年。『日本語小文典』(マカオ: 1620)(上下) 池上岑夫訳, 岩波文庫, 1993年。

*6 宮崎克己「レオン・ド・ロニー『アントロジー・ジャポネーズ』をめぐる人々」ジャポニスム学会第6回岡山シンポジウム, 2016年10月21日。

*7 「ハーン研究の新展開〜ヘルン文庫の活用〜」比較文学学会第52回開催支部大会シンポジウム, 2016年11月12日席上の筆者との質疑における中島淑恵氏のご返答に負う。記して謝意を表する。

*8 William G. Aston, *Shinto, The Ancient Religion of Japan*, London, Archibald Constable & Co., 1907, pp.170-171; 吉川報告に言及あり。そのほか出典の詳細は、吉川論文の公刊に待ちたい。

*9 遠田勝「『神国日本』考—チェンバレンとの対立をめぐる」『比較文学研究』47号, 東大比較文学会, 1985. Tōda Suguru, "Hearn's Romantic Representation of Shinto, the Way of Japanese Gods," in *Lafcadio Hearn in International Perspectives*, Sukehiro Hirakawa (ed.), Global Oriental Ltd., Folkestone, Kent, UK., 2007, p153-158.

*10 稲賀繁美『絵画の臨界』名古屋大学出版会, 2014

年, 第1部第4章参照。

*11 稲賀繁美「博物館の夜にミネルヴァの梟はどこを目指して飛ぶのか?」『あいだ』139号, 2007年7月20日, 28-44頁。及び稲賀「ギュスターヴ・モローと亀」『図書』岩波書店, 2018年9月, 2-7頁。

*12 問題の手描きの「畳」のスケッチは、一般に入手可能なル・コルビュジエのメモ帖に公表されている。高階氏 (Ibid. p.18) によれば、その該当図版の出典は The Architectural History Foundation (ed.), *Le Corbusier Sketchbooks*, MIT Press, Cambridge, 1981. Sketchbook Vol.1, B-9587.

*13 ケビン・ニュート『フランク・ロイド・ライトと日本』大木順子訳, 鹿島出版会, 1997年。

*14 Bruno Taut, *Das japanische Haus und sein Leben*, Mann Verlag, 2010がマンフレッド・シュバイデルによりドイツ語原文をはじめて刊行している。

*15 Kikuchi, Yuko, "The question of Japaneseness and the creation of the "greater oriental design" for crafts of the Japanese empire," *Proceedings of the 2010 International Conference on Taiwan Studies*, "Taiwan under Japanese Rule: Cultural Translation and Colonial Modernity". Taiwan Studies Series, 5, The Center for Taiwan Studies, UC Santa Barbara, Santa Barbara, CA., 2011.

*16 森仁史(編)『ジャパニーズ・モダン—剣持勇とその世界』国書刊行会, 2005年。

*17 ヘレナ・チャブコヴァー「アントニン・レーモンドとル・コルビュジエ」稲賀(編)『海賊史観からみた世界史の再構築』思文閣出版, 2017年, 487-504頁。

*18 稲賀『接触造形論』名古屋大学出版会, 2016年, 第3部第1章参照。

*19 佐藤尚武『回顧八十年』時事通信社, 1963年。なお佐藤と柳澤とは親交があったようだ。寺本敬子「1937年パリ万博へ日本参加とその背景」, 幕沢剛巳(他)編『幻の万博』青弓社, 2018年, 184-202頁。

*20 柳澤健『泰国と日本文化』不二書房, 1943年; 『印度洋の黄昏 柳澤健遺稿集』柳澤健遺稿集刊行委員会 1960年。

*21 Rem Koolhaas, Hans Ulrich Obrist, *Project Japan, Metabolism Talks*, Taschen, 2011. Pp.206-221.